

# 二合五勺に関する愛国的考察

坂口安吾

青空文庫



元和寛永のころという、今から三百二三十年前のことだが、  
切支丹キリシタンが迫害されておびたゞしい殉教者があつたものだ。幕府  
の方針は切支丹を根絶しようというのだが、みんな殺そうとい  
うのではないので、転向すれば即座にかんべんしてくれるのだから、  
ひところの共産党の弾圧よりもらくだ。転向してもまだ何年か牢  
屋に入れておくということはやらぬ。そのかわり転向しないと必  
ず殺す。懲役二十年、十五年などとこまかく区別はつけず、例外  
なしに殺すのだから、全部か皆無か、さっぱりしていて、われわ  
れの常識では、もつとも大いにあつさりと転向したろうとおもう  
と、そうではない。何万かの人間がもつとも大いによるこんで殺

されたというから、勝手にちがうのである。

この殺しかたにもいろいろとあつて、はじめは斬首であつたが嬉々として首をさしのべ、ハリツケにかければゼススさまとおなじ死にかただと勇みたつ始末だから、火あぶりにした。苦しめて殺してやれというので、すぐ火に焼けて死なゝいように一間ぐらいはなして薪をつんで火をつけ、着物に火がつくと消してやつて長く苦しめるといふやりかただが、苦しむのが一時間から数時間、死にいたるまで朗々と祈祷をとなえるもの、観衆に説教するもの、子をだく母は子供だけは苦しめまいとかばいながら、我慢をおし、今にゼススさま、マリヤさまのみもとへゆけるのだからとわが児に叫ぶ。その莊嚴には、観衆にまぎれて見物の信徒はますます信

教の心をかため、縁のない観衆も死刑執行の役人どもまで、感動してかえって信仰にはいるものが絶えないという始末であつた。

温泉岳の熱湯ぜめといつて、噴火口の熱湯へ繩にくゝつてバチヤンと落してひきあげ、また、落し、また、ひきあげる。背中をさいて熱湯をそぐぐというのものもある。熱湯のかわりに煮えた鉛をそぐぐのものもある。鋸で、手と足を一本ずつひき落して、最後に首をひくというのものもある。手の指を一本ずつ斬り、つぎに耳を、つぎには鼻をそぐぐという芸のこまかいのものもある。蓑踊りと称するのは、人間を俵につめ、首だけださせて、俵に火をつける。俵のなかのからだか蓑虫のようにビクビクもがくところから蓑踊りと称したという。

最後に穴つるしというのを発明した。手足を特別な方法で後方に縛して穴の中へ吊りさげるものようだが、具体的な方式は各人各説、ハッキリしていないようだ。これをやると三四日から一週間ぐらい生きている。そして、へんなふうにもがきつゞけている。妙チキリンなものがきかたで、見ていると、おかしくなり、ばかばかしくなるばかりで、第一、例の祈祷を唱え、説教するため、の莊嚴なるこえがでない。異様に間抜けた呻きこえがもれるばかり、およそ死の莊嚴というものがみじんもないから、見物の信徒もうんざりしてしまう。そのために、この穴吊しの発明以来、信徒がめつきりと減り、たちまちにして切支丹は亡びてしまったという。もっとも転向のふりをして踏絵をふみ、家にかえってマリ

ヤ観音にお詫びをするという潜伏信徒は、明治にいたるまでつゞいていたのである。

つまり穴つるしという発明によつて刑死の莊嚴を封じたのが、信教絶滅の有力な原因だったといつぱんに解釈せられているのである。時間の問題もあつたであらう。時間に勝ちうる人の心はありえないから。しかし、穴つるしがその時間を早めたことも事実ではあつた。



こういう異常な殉教の事実をふりかえると、まるでわれわれは

別人種の壮烈な信仰と魂を見るような、手のとゞかない感じがする。

ところが幕末になって、欧米との交渉が再開し、日本在住の外人のために天主堂の建設が許されて、第一に横浜に、つぎに長崎の大浦に天主堂ができた。横浜のはなくなつたが、大浦のは現存し（もつとも戦争でどうなつたかは私は知らない）、日本最古の教会、また、洋風の美建築として国宝に指定せられている。

この教会は日本在住の外人のためにのみ建てられたもので、日本人の信仰は、依然許されていなかった。もつとも見物は許されて、もの好きな日本人のことだから連日見物人のあとを絶つことがなかつたが、それらの日本人にむかつて神父の説教は厳禁せら

れていた。

ある日、十何人かの老幼男女の一団がやってきた。あちこち堂内を見物していたが、ほかに見物人のいないのを見ると、突然プチジャン神父のもとへ歩み寄って、マリヤさまはどこ？ とときく。マリヤの像の前へ案内すると、あゝ、ほんとにマリヤさま、ゼススさまをだいていらつしやると、なつかしげに叫んだが、やがてみなみなひざまず跪いて祈りはじめてしまった。

彼らがプチジャン神父の問いに答えて告げたことは、彼らは浦上のものであり、浦上の村民のほゞ全数は元和寛永のむかしから表むき踏絵をふみ、仏徒のふりをしながら、ひそかにマリヤ観音を拝み、二百余年の潜伏信仰をつたえている、ということだった。

話の途中、見物人のくる気配につとはなれて、なにくわぬふうをして、かえつていったという。これが日本における切支丹復活の日だ。

この日から、神父と浦上部落とに熱烈な関係ができたのはいうまでもない。そのうちに明治となり、この事実が発覚した。明治政府はまだ信仰の自由を許しておらぬ。例の王政復古というやつで、宗教は神道ひとつ、仏教もつぶしてしまえという反動時代だったから、切支丹の復活を許すだんではなかった。何千という浦上部落の信徒が老幼男女一網打尽となり、多すぎて牢舎の始末もつかぬから、いくつかの藩に分割して牢にこめられ、とり調べをうけ、棄教をせまられる。

寒ざらし、裸にして雪の庭へ坐らせるなどとそうとうの拷問もあつたようだ。ところが拷問によつては、いつかな棄教せぬ。例の祈禱を唱え、痛苦に堪え、痛苦の光榮に陶醉するものゝごとくますます信仰をかためるというぐあいである。こゝまでは、元和寛永のむかしとかわらぬ。

ところが、こゝに、意外なことが起つた。肉体に加えられる殘虐痛苦に対してますます信念をかためるとき彼らが、たわいもなく何百人、一時に棄教を申しでるといふおもわぬことが起つて、役人をまごつかせたのである。

ことの起りは空腹に堪えかねたのだ。そして悲鳴をあげてしまつた。身に加わる殘虐痛苦にはその莊嚴と光榮がかえつて彼らを

神に近づけてくれたが、無作意な、なんの強要もない食糧の配給に、そして、その量のたくまざる不足に、強要せられずして神からはなれてしまったのである。その食糧は決して少い量ではなかった。彼らの配給は正確に一人一日あたり三合であつた。役人たちは食物によつて棄教せしめることなど空想もしていなかつたので、規定どおりの三合を与え、頭をはねたりはしなかつた。今とちがつて、米のない時世ではなかつたから。そして、雪の上へ裸で坐らせて、そつちの方法で棄教させようと大汗を流していたのであつた。



農民は一升めしが普通だという。切支丹農民でもやつぱり一升めしの口であったのだらう。それにしても、拷問に屈せぬ彼らが三合の配給に神をうらぎったとは夢のようだ。しかし、みじんも嘘ではない。『浦上切支丹史』に書かれている事実だ。

二合五勺配給のわれわれはどうにも信じようがなくなるのは無理もない。われわれはついさきごろまでは二合一勺だの、そのうえ、その欠配が二十日もつゞいていたのだから。しかるにわれわれは暴動も起しておらぬ。拷問よりも三合の米に降参したという浦上切支丹の信仰が、だらしがなかったのではなからう。要するに、戦争というものが、信仰などより、ケタちがい深遠巨大な

魔物であるからに相違ない。われわれは、このふしぎさを自覚していないだけだ。勝手に戦争をはじめたのは軍部で、勝手に降参したのも軍部であつた。国民は万事につけて寝耳に水だが、終戦が、しかし、自分の意志でなかつたという意外の事実については、おゝむね感覚を失っているようである。

国民は戦争を呪つていても、そのまた一方に、もつと根底的なところで、わが宿命をあきらめていたのである。祖国の宿命と心中して、自分もまた亡びるかも知れぬ儚さを甘受する気持になつていた。理論としてどうこうということではない。誰だつて死にたくないにきまりきっている。それとは別に、魔物のような時代の感情がある。きわめて雰囲氣的な、そこに論理的な根柢はまっ

たく稀薄なものであるが、ぬきさしならぬ感情的な思考がある。

家は焼かれ、親兄弟、女房、子供は焼き殺されたり、粉みじんに吹きとばされたり、そういう異常な大事にもほとんど無感覚になつてゐる。人ごとではない。自分とて今日明日死ぬかも知れず、いな、昨日死なゝかつたのがふしぎな状態を眼前にしながら、その戦争をやめたいとみずから意志することは忘れていたのである。忘れていたのではない、その手段がありえなかつたからあきらめていたのだといつても、おなじことで、要するにあきらめていた。勝手に戦争をやめ、降参したのは、まさしく天皇と軍人政府で、国民の方はおゝむね祖国の宿命と心中し、上陸する敵軍の弾丸、爆弾、砲弾の隙間をうろうろばたばた、それを余儀ないもの

におもつていたので。

もとよりそれは本心ではない。人間の本心というものは、こればかりはわかりきっているのだから。曰く、死にたくない、ということ。けれども、本心よりも真実な時代的感情というものがあ  
る。人の心には偽りがあり、その偽りが真実のときは、真実が偽  
りでありうることもある。人の心は儂い。心の真実というものが  
儂いのだ。

戦争中のわれわれは、たゞ宿命の子供であつたから、それで二  
合一勺ぐらいの配給に不足もいわず、芋だの豆の差引だの、欠配  
だの、そういうことに不平や呪いがあるにしても、同時にあきら  
めていたのである。不平や呪いは自我のこえであるが、自我はす

でに影であり、宿命の子供が各人ごとの心に誕生して、その別人が思考し、生活していたからであつた。



戦争は終つた。しかし、戦争の宿命の子供はまだわれわれの自我と二重の生活をしており、主としてわれわれはまだ今日も宿命の子供で、ほんとうの自我ではないらしい。それは当然の話で、われわれの周囲は焼け野原であり、交通機関はヨタヨタし、要するに、バクダンはなくなつたが、まだわれわれはまったく戦争の荒廃の様相のなかにいるからだ。われわれはあきらめているのだ。

いな、われわれ自身が考えるさきに、われわれの心のなかで、別人があきらめてしまっている。戦争に負けた。ない袖はふれぬ。

二合五勺の、それに芋がまじっても、しかたがない、と。

戦争中そうであつたごとく、われわれは今もなお、自我よりもむしろ宿命の子供であり、祖国の悲劇的な宿命にみずから殉じているのである。だからわれわれは二合五勺に芋がまじっても、暴動も起さない。われわれすべてが、殉国者である。

残虐無慙な拷問に堪え、嬉々として命をさゝげた魂が、三合の配給で神をうらぎつたという。拷問のかずかずとその殉教のはげしき、その歴史的断片だけをきりはなすと、われわれのぐうたらな生身のからだは手がとゞかなくなるのだけれども、実は彼らに

も、やっぱり、ぐうたらな生身のからだがあつたのである。

そしてわれわれの世代には、信教のためではなく、祖国のために、何百万かの人々が死んだ。彼らは必ずしも嬉々としては死ななかつたに相違ない。あるものは大いに祖国を呪いながら死んだかも知れぬ。それはおそらく切支丹の殉教の際も同様であつたに相違ない。なかには神を呪いつゝ死んだものもありえたはずだ。そして彼らがもし生き残れば、復員してヤミ屋となつたり、泥坊になつたかも知れず、それが切支丹の場合であつても同様に棄教してなにもになつたかわからない。

三合の空腹に神を売つた何百人かも、もし食物に困らなければ、拷問に死んで殉教者となつたかも知れぬ。しかし、われわれが、

現に二合一勺のそのまた欠配つゞきでも祖国をうらぎっておらぬことだけはまちがいが無い。つまりわれわれは過去の歴史が物語るもつとも異常、壮烈な殉教者よりも、さらにはなはだしく、異常にして壮烈な歴史的人間であつた。

しかしわれわれはその異常さも壮烈さも気づきはしない。なぜならわれわれの日常はぐうたらで、ヤミの買出しにふんづかまつてドヤされたり、電車のなかで突きとばしたり、突きとばされたり、三角くじを何枚買つてもタバコがあたらず女房になぐられ、その日常の生活からは、異常にして壮烈なる歴史的人格などは、いっつこうに見あたるよしもないからである。

しかし、われわれが日本カイビヤク以来の異常児であり、壮烈

児であることはまちがいが無い。なぜなら、切支丹は三合で神を売ったが、われわれは二合一勺の、そのまた欠配つゞきでも、祖国を売らなかつたからである。この事實は、すべてが公平な歴史となつたときに、後世が判定してくれるはずである。

歴史と現実とは、かくのごとくに、まったく質がちがつている。現実というものは、いかなるときでも、いつこうにみずからの歴史的な機会のごときものを自覚しておらず、つねに居眠つたり、放尿したり、飲んだくれたりするたゞの人間であることを免れず、ぐうたらで、だらしがないものだ。歴史の人物は歴史のうえで、歴史的にしか生活していないが、現実の人間というものは、主として夫婦喧嘩だの、三角くじの残念無念だの、酔っぱらって怪我

をしたのと、あさましいことばかりで、二合一勺のそのまた欠配つゞきでも祖国を売らなかつた歴史的美談のごときは、みずから意志した気魄のあらわれではなかつた。彼らは配給の行列で配給係のインチキを呪つたり、ときには大いに政府の無能を痛罵して拍手カツサイしている自分の方を自分だとおもっており、カイビヤク以来の大奇怪事を黙認して、二合一勺のそのまた欠配だの、焼けだされの無一物に暴動も起さぬ自分を自覚してはいない。そしてかゝる無自覚な面が歴史的に復活しておもいもよらないカイビヤク以来の愛国者になるであろうということなどは、もとより夢にもおもわない。

現実はおかしくのごとく不安定ではあるが、また、不逞にして、ぐ

うたらで、健康なものだ。歴史は病的なものであり、畸形で、歪められているのである。すなわち、歴史的事実だけで独立して存し、特殊な評価を強いている。

それは歴史のみのカラクリではなく、現実もまた歴史化するこゝとが可能だ。軍神など、いうものをデタッチあげて、歴史化する。美談はおゝむね歴史化であり、偉人も悪党も、なべて同時代の人間の語りぐさもあらかたそうであり、ぐうたらで、だらしがいないのは自分とその環境だけ、そして環境をではずれると、現実もまた、歴史的にしか実在していないものだ。



私は本来世に稀れなぐうたらもので、のんだくれで、だらしないから、切支丹の殉教の気魄などには大いに怖れをなして、わが身のつたなさを嘆いていたのであつたが、この戦争によつて、にわかにならぬ自信をえた。それは要するに、例の二合一勺と切支丹の三合に瞠目した結果にほかならぬのだが、私といえども、二合一勺のそのまた欠配つゞきでも祖国を売らなかつたカイビヤク以来の歴史的愛国者であることを自覚したからであつた。

おもえば私はおもしろがつて空襲を見物して、私自身も火と煙に追いまくられて逃げまわつたり、穴ボコへ盲滅法とびこんで耳を押え、目を押えて突然神さまをおもいだしたり、そういうこと

も実際はさして身につまされておらず、戦争中も相かわらずつねにぐうたらで、だらしがなかった。

それにもかゝわらず、戦争というやつは途方もない歴史的な怪物、カイビヤク以来の大化けものであったに相違なく、諸方の戦地で何百万の人々が死んだが、私自身の周辺でも、四方の焼跡で、たぶんさほど祖国も呪わず宿命的、いわば自然的にたゞ焼け死んだ大きな焼鳥のような無数の屍体も見たのである。吹きちぎられた手も足も見たし、それを拾いあつめもした。まったく無感動に、今晚の夕食の燃料のために焼跡の枯木を盗みにゆくよりもはるかに事務的な無関心で、私は屍体を見物し、とりかたづけていたのである。

そのこと自体がカイビヤク以来の大事であり、私自身が歴史的な一大異常児であることを、そのときどうして気づきえたであろうか。私はたゞ、ぐうたらな怠けもので飲んだくれで、同胞の屍体の景観すらも酒の肴にしかねない一存在でしかなかった。その私すら、しかし、歴史的に異常にして壮烈な愛国者として復活しうるといふ、歴史のカラクリと幻術を、私は今、私自身について信じることができる。

私はしかし歴史の虚偽を軽蔑しようとはおもわない。知識ほど不安定なものはないからである。文化人よりも未開人の方が安定しているに相違ない。都会人よりも農村の方がより少しか戦争の雰囲気や感情にまきこまれなかったに相違ない。そのかわり

終戦後の変化にも、都会人はすぐ同化しえても、農村人はなかなか同化しないに相違ない。文化的に未開なものほど安定しているものなのだ。

歴史も知識の所産であつて、したがつて不安定で、必ずしも歴史的に安定するという絶対性をもつことはできぬ。その意味において、歴史的虚偽は虚偽なりに、われわれの現実とも相応しているからであつた。そしてわれわれの現実は、これまた、安定してはおらぬ。知識はつねに不安定で、つねに定まる実体がない。

私はしかし、そういう屁理窟はとにかくとして、私がカイビヤク以来の愛国者で、二合一勺のそのまた欠配つゞきに暴動ひとつ起さなかつた歴史的人格の一人であつたという発見に大いに気を

よくしているのである。

そればかりではない。私は今もあいにく生きているゆえに天下に稀れなぐうたらものであるけれども、三四年前戦地にあれば殉国の愛国者でありえたかも知れぬ。いな、必ずありえたはずである。私は今朝の新聞に、カラフトの郵便局の九人の女事務員が、ソビエト軍の攻げきに電信事務を死守し、いよいよ砲弾が四辺に落下しはじめたとき、つぎつぎに服毒しておのおのの部署に倒れていったという帰還者の報告を読んだ。もしも殉国の九人の彼女らが今日もなお生きていたなら、今日なにもとなつてゐるか、その想像を怖れる必要はないのだ。人間はそういうものだ。歴史的美談を怖れる必要もなく、また、われわれの現実のぐうたらを

怖れる必要もない。すべてはおなじもの、人間、たゞ、それだけなのである。

だから私は近ごろでは、もう切支丹の殉教の気魄などにはいっ  
こうにおどろかず、善人だの忠臣だのにおどろかず、あべこべに  
たいへんな鼻息で、ときには御機嫌のあまり、『日本の悲惨なる  
敗北と、愛国者坂口安吾氏の偉大なる戦記』など、いう一大叙事  
詩をものしてやろうかなど、途方もない料簡を起したりする。

算術の達人があらわれて、浦上切支丹の三合と、私の二合一勺  
との歴史的価値の差異軽重について意外な算式と答を見つけたし  
ても、私はいっこうに悪びれないのは、私は算術の公式にない詭  
弁の心得があるからで、曰く、私は私だ、ということ、つぎに、

すべては、たゞ人間だ、ということ、これである。

されば今日二合一勺のそのまた欠配に暴動を起さなかつた諸嬢諸氏すべて偉大なる殉国者であり、その愛国の情熱はカイビヤク以来のものであることを確信し、今日諸嬢諸氏の現身がいかにほどぐうたらでだらしなくとも、断々乎として、自信、自愛せられんことを。げに人間はぐうたらであり、偉大であります。

# 青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 04」筑摩書房

1998（平成10）年5月22日初版第1刷発行

底本の親本：「女性改造 第二卷第二号」

1947（昭和22）年2月1日発行

初出：「女性改造 第二卷第二号」

1947（昭和22）年2月1日発行

入力：tatsuki

校正：宮元淳一

2006年5月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 二合五勺に関する愛国的考察

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>